

アスベスト被害の根絶をめざす 京都の会ニュース

2015年12月1日 第6号
アスベスト京都の会 発行
事務局: Tel.075(662)5321
(京建労本部気付)

住民・労働者のいのちと健康を守る運動へ発展を アスベスト被害を考えるシンポに 60人

「アスベスト被害の根絶をめざす京都の会」は、10月17日にキャンパスプラザ京都で「アスベスト被害の今後をみんなで考えるシンポジウム」を開催し、23団体60人が参加しました。

特別講演として、「大阪府立金岡高校アスベスト飛散事件と、学校アスベスト」と題して大阪アスベスト対策センターの伊藤泰司氏から自ら取り組んできた学校飛散事件に触れながら報告。「日本でも2006年から2011年の6年間で137人の教員が中皮腫で亡くなっているが、公務災害として認められたのは4人だけ、教員は、アスベスト危険職種とされている国もあるぐらいで、教員が危ないと言うことは日本中の子どもが危ないと言うこと、あらゆる組合がもっと重要課題として位置づけ取り組みをすすめるべき。」と強調しました。

その後、石原氏（京都の会会長）をコーディネーターに医師、マスコミ記者、学者、弁護士、講師の伊藤氏から、それぞれの立場から報告（以下記載）、会場からの意見等もあり今後の活動に生かせる内容となりました。



5人のパネリストが報告し認識を深めました



伊藤泰司氏

再読影は、がん見落としや掘り起こしのためにも重要（水嶋医師）

京建労の再読影を診て来ているが、今年度も4117人中、「経過観察必要で所見あり」が330人（8%）、「要精査」が207人（5%）で13%。

その後、必要な人については組合にフォローを依頼しているが、こういったアスベスト関連疾患の診断能力には、医療機関によって差がある。

また、どうしても肺がんの見落としを減らすためにも再読影は必要だしじん肺、石綿肺あるいはびまん性胸膜肥厚など良性疾患の掘り起こしにも再読影は重要。そして、今後間違いなく被害は広がるために、それを見抜ける医師の育成も大切と強調しました。



水嶋潔医師
(水嶋クリニック)

今まで知らなかった。今後も被害の実態を記事にしていきたい(落合記者)



落合宏美記者
(読売新聞)

記者になって、先輩から言われて初めてアスベストについて知った。また、この間、青山さん、小林さん、寺前さん等の取材を通じて、被害の恐ろしさを痛感し「何で危険なものを使わせていたのだろうか」という思いも持つようになった。まだまだ、教わりながらだが判決に向けても、さらに原告の取材を続けていきたい。今後さらに被害が広がると予測されるので、建設現場がどうなっているのかも取材したい。取材できる方がいれば協力をお願いします。



南慎二郎専門研究員
(立命大)

復旧作業従事者にも中皮腫患者が発生。抜本的な対策必要(南氏)

建築物等に含有されているアスベストが震災により倒壊飛散し被害が広がることが考えられる。20年前の阪神淡路大震災を通じた被害を調査すると、復旧作業従事者へのアンケートで6%がアスベスト関連所見が確認され、住民の中でも1.1%に所見があった。今後、アスベスト含有の可能性のある成形板等の瓦礫処理の徹底や吹付けアスベスト解体事前調査の実施の徹底が必要。東日本大震災でも今後被害が考えられる。

1月の判決での訴訟勝利をもとに全面解決を(村山弁護士)

2011年6月に提訴したが、何と云ってもアスベスト問題を社会的な問題に広げていくこと、被害を広げた国や企業の責任を明確にさせること、救済制度を作らせることが重要。そのために、被告企業を絞り込んだり、一人親方でも補償の対象にしていくために様々な立証をして主張してきた。何としてもこれ以上被害を広げないためにも裁判に勝って早期解決の足がかりにしていきたい。



村山弁護士
(京都訴訟弁護団長)



まさか自分になるとは思わなんだ。何とかがんばる。

私は、美山で仕事していたが、まさか自分がアスベストにかかるとは思わなんだ。健診で見つかり、手術のときに写真を撮ってもらって認定された。ともに提訴した仲間がどんどんと亡くなりさびしいが、何とかがんばりたい。

アスベスト京都の会の第3回定期総会が、シンポジウムの前に開催されました。確認された体制は右記

【2015年度役員体制】(敬称略)

会長:石原一彦(立命館大学政策科学部教授)

副会長:吉岡徹(京建労委員長)河口隆洋(職対連会長)津島久孝(民医連中央病院副院長)福山和人(自由法曹団)梶川憲(京都総評議長)事務局長:松原秀樹(京建労書記次長)幹事:加盟団体より1人、事務局:京都総評・職対連・いの健・京建労より

会計監査:酒井仁巳(京建労書記長)